

珈琲はいいく



## 時が止まった孤島『軍艦島』 !!

日々の現実を離れ、ひと時悠久の孤島“軍艦島”の異空間を体験してみませんか？

長崎港の南西約 19km の沖合に浮かぶ「端島（はしま）」。

海底炭鉱がねむる、南北 480m、東西 160m、周囲 1200mm の小さな岩礁島である。

その姿は、艦船「土佐」に島影が似ていることから「軍艦島」と呼ばれるようになった。

島全体を囲う天然の岩壁に盛り土をし、周囲にコンクリート壁を立ち上げ、狭い敷地中に建設された住宅群や鉄筋コンクリートが並ぶ姿は要塞そのもので、繁栄を極めた最盛期には、明かりが消えることはなく、海に浮かぶ不夜城の如くであった。しかし、エネルギー革命により閉山。かつて世界一の人口密度を誇り、世界一コンパクトな最新鋭海上都市であった軍艦島は、伝説を残し無人となり、時の流れとともに朽ち果て“廃虚の島”となった。

2015 年、約 40 年余りの眠りから覚め、世界文化遺産となり新しい歴史を刻み始めた。



軍艦島には、小中学校や店舗などの生活に必要な施設や、病院や映画館など娯楽施設まであり、島の中で生活が完結出来るほどで、狭い敷地に多様な施設を建設するためにレイアウトの工夫や、大正時代の日本初鉄筋コンクリート住宅、吹抜や地下構造など、非常に近代的でモダンなつくりの街並みだったという。

ただ、朽ち果てた建物などをみると、人類が滅亡してしまったあとの都市を見ているようで、まるでジブリの～天空の城ラピュタ～のワンシーンを思い起こさせる存在感である。

石炭の採掘と共に急激に発展し、また急激に衰退したゴーストタウンならぬゴーストアイランドさながらであるが、そこにあるのはただの瓦礫の山ではなく、住んでいた人々の痕跡や、生活していた事実とその息吹を感じ得るのは、この島から人が去っていった時そのままの状態が残されているからであろう。

夜になると波しぶきと風の音だけが響く、この島の栄枯盛衰を知る灰色の巨大船はどんな想いで佇んでいるのだろうか。寂寥、哀愁、好奇、興奮、畏怖・・・訪れた者の胸に、これほど様々な想いを抱かせる場所はなかなかありません。この圧倒的な存在感や滅び行くものの美しさは、現地を訪れてこそ伝わってくるものでしょう。

日々、朽ち果てゆく世界遺産「軍艦島」!! ぜひ、実際に訪れて、他では味わえない雰囲気を感じてみられてはいかがでしょうか？